

204. 平成4年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

平成5年3月5日、恒例の県下発掘調査スライド大会が滋賀県埋蔵文化センターで実施されました。

本年度と県下では、多くの発掘調査が行われ、多くの貴重な成果を上げています。ここにその成果の一部を紹介いたします。

今後の参考として活用いただければ幸いです。尚、御多忙の中、御協力いただきました方々には厚く御礼申し上げます。

1. 日本化傾向を示す渡来人の集落を検出 大津市高砂町 かたかさこ 上高砂遺跡

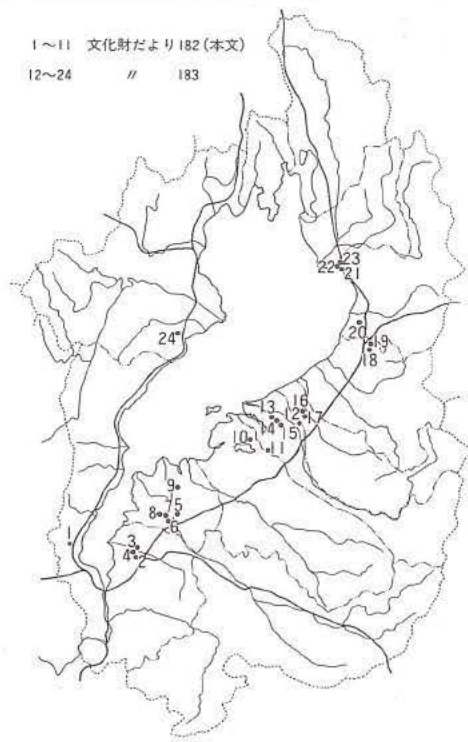
上高砂遺跡は、大津市滋賀里町甲から高砂町に広がる古墳時代から平安時代にかけての遺跡であり、大きく古墳時代の集落跡と平安時代の寺院に関連した機関の施設に設けられる。

遺跡の周辺は、歴史的環境の密度が濃い地域で、大津京と深い関わりのある崇福寺すうふくじや南滋賀廃寺がある。更に、遺跡を直接取り囲むように、ドーム状の構造を持つ横穴式石室とミニチュア炊飯具型土器ひのけつの副葬に特徴があり、渡来系氏族の墓とされる百穴古墳群、太鼓塚古墳群、福王子古墳群などの群集墳が集中する地域でもある。特に、太鼓塚古墳群とは遺跡の北を直接接している。



日本化傾向を示す住居跡

1~11 文化財だより182(本文)
12~24 // 183



遺跡位置図 (位置図の番号は本文と同じです)

この遺跡は、個人住宅建設に伴った発掘調査で発見され、その後、昭和62年に、西大津バイパス建設工事に際し調査が行われている。更に、都市計画道路建設に伴い、平成元年度から発掘調査が続けられ、本年度は、その4年目にあたる。

今回の調査では、大きく四層の遺構面を検出したが、その中心は、6世紀中葉から後半にかけての竪穴住居で、切り合いがあるものの13基を検出した。この竪穴住居は一辺5~6mの比較的大型の建物で平面プランには隅丸方形を呈していた。また、それにやや先行する柱穴が20cm以上を計り、柱間が1.6~1.8mの4間以上×3間のものとして3間×3間以上の掘立柱建物も3棟検出した。更にそれらに先行する切妻大壁造建物1棟を検出した。

このうち、竪穴住居と切妻大壁造建物の前後関係を見ると、切妻大壁造建物の上に丁寧な貼床を施した竪穴住居が造られていることが窺え、このことは住居に

於ける渡来文化の日本化の過程を示す良好な資料であると言える。(大津市教育委員会 須崎雪博)

2. 道路状遺構を伴う建物群を検出 草津市矢倉 坊主東遺跡

草津市矢倉一丁目坊主東付近に位置する坊主東遺跡は、以前の調査により奈良～平安時代の集落跡であることが知られていたが、集落の中心部の様相は確認されていなかった。

今回、当遺跡内において店舗建築工事が計画されたため、1,885㎡を調査対象として、平成4年9月～12月に調査を実施した。

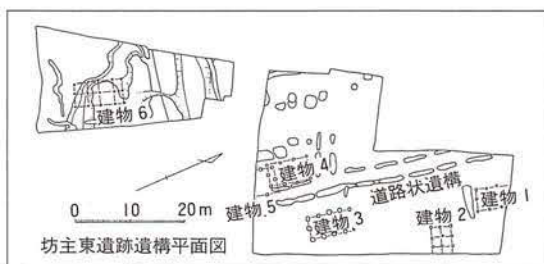
調査の結果、奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡6棟以上、道路状遺構、溝跡、土坑等が検出され、遺構内より土師器、須恵器等の遺物が出土した。

今回検出された遺構の中で特徴的なものは、調査区北側中央部をほぼ正南北に走る道路状遺構である。この遺構は、長さ4m前後の溝が対になって連続している形状で、個々の溝は幅が狭い割には深く、急激に落ち込んでいる。不連続の部分が通路であったのか、それともかつては連続した溝であったものが、削平を受けて、深みの部分だけが不連続に残ったものかは、現在の状況だけでは判断できないが、深みの部分が宅地の区画の単位であった可能性が考えられる。

この道路状遺構は、北側は調査区外となるが、南側は調査区内で消滅している。そして中央部南寄りに、西側へ分岐する部分が存在するが、西側への伸びは短く、途中で消滅する。

これまでの草津市内の調査で、道路と建物跡とが同時に検出された調査例が少ないため、今回の検出例は当時の集落の形態を知る貴重な資料を提出したと言える。

(草津市教育委員会 藤居 朗)



3. 大規模な墓域を検出 草津市西渋川 門ヶ町遺跡

門ヶ町遺跡は草津市西渋川1丁目周辺に所在する弥生時代から平安時代にかけての集落跡である。

今回、遺跡所在地内で共同住宅等が計画されたため



9次調査区 遺構検出状況

その事前調査を実施、調査面積は8次調査が400㎡、9次調査区が900㎡である。

調査の結果、掘立柱建物跡10棟、方形周溝状遺構14基、井戸跡1基、溝跡3基、土坑2基のほか多数の遺構が検出された。

8・9次調査区で、最も古いと考えられる遺構は方形周溝状遺構で、8次調査区ではMT15並行期の須恵器を出土した溝跡に切られている。9次調査区では、明らかに方形周溝状遺構に属する遺物として古墳時代前期の壺が出土しているが、周溝中央上層からは、8次調査区の溝跡と同じく、MT15並行期の須恵器等が出土していることから、当該時期まである程度周溝が開口していたようである。また、9次調査区の方形周溝状遺構を切る井戸跡からはTK217並行期の須恵器が出土していることから、当該時期までに周溝は埋没していたと判断される。

次に、10棟検出された掘立柱建物跡は大きく2群に分けられ、真北から35度前後東に振る一群、いわゆる、栗太主条里に合致するものと、真北から35度前後西に振る一群が存在し、いずれも、明確な時期を決定する遺物は出土していない。ただ、9次調査区の井戸跡がいずれかの一群に帰属すると考えられることから、7世紀前半以降の建物群と判断される。

今回の調査で、当遺跡の墓域と考えられる方形周溝状遺構群が検出され、過去の調査では、明確な住居跡は検出されていないもの、遺跡範囲の北部で弥生時代中期から古墳時代後期の遺物が多量に出土したことから、遺跡北部が居住空間として、南部が墓域として明確に区分されていたと推測される。

(草津市教育委員会 谷口智樹)

4. 古墳時代から近世にかけての複合遺跡 草津市西矢倉 谷遺跡

谷遺跡は、これまでの草津川改修に伴う発掘調査によって、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である



全 景 (東から)

ことが判明している。今回も河川改修に伴う発掘調査として6,600㎡を対象に発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代後期に属する竪穴住居群と古墳群を検出したのを始めとし、飛鳥時代の祭祀遺構、奈良時代から中世中葉にかけての掘立柱建物群などを検出することができた。

この内、竪穴住居からは滑石製品製作に関すると思われる、滑石原石や剥片などが住居床面および土坑内から出土しており、当該地に於ける滑石製作に関する資料を得ることができた。一方、古墳群は一辺約10m強の方墳3基より成立しており、なお近隣に同様の古墳の存在が予想される。

調査区西側の扇状地末端の低地には、湿地が広がるが、この湿地内には古墳時代から奈良時代にかけての多量の土器が内包されていたほか、直刀模造木製品などの木製品が出土している。また、この湿地縁辺には、齋串などを含んだ土坑が検出されており、水辺での祭祀が行われていたことが確認された。なお、この齋串については、出土した須恵器から7世紀中葉と考えられ、本市における最古の齋串の可能性がある。

掘立柱建物は、方位から大きく3群に分類することが可能であるが、群における建物立地に規格性は認めにくい。建物群は、中世中頃にて途絶えるようであるが、これ以後、当該地は農耕地として土地利用が図られると推測される。

今回の調査によって、谷遺跡は都合14,900㎡余が調査され、遺跡の大半が調査されたことになる。今後、時代毎の集落の構造分析や周辺遺跡との関連性を通して、本遺跡の全容が解明できる日も近いであろう。

(草津市教育委員会 小宮猛幸)

5. 最古級の硯 (中空円面硯) が出土
野洲町行畑・中畑 中畑古里遺跡

中畑古里遺跡は、妙光寺山から派生する標高約100.5



中空円面硯

m~98mの低丘陵と旧河道による自然堤防上に立地している。周辺には北に旧東山道・下々塚遺跡、北東には安城寺遺跡・小篠原遺跡、東には、塚ノ穴古墳が存在しており、弥生時代後期から中世までの遺跡が集中している地域の南端の一角に位置している。

古墳時代後期の溝・焼土坑などを検出した。溝SD-01は最大幅は、4.55m、深さ1.2mである。断面形は、ほぼ逆台形を呈し、上層からは、灰釉陶器皿、黒色土器片が出土している。中層で7世紀初頭の須恵器を中心とする土器が多量に出土し、一定の時間幅で廃棄または、祭祀行為に土器の投げ込みによると思われる。最下層からは少量の弥生土器が出土した。

トレンチ東側へ緩やかに傾斜しながら落ち込みSX-01を検出した。遺構ではなく、自然地形と見られる。6世紀末から7世紀初頭の須恵器高坏、小型短頸壺、土錘、中空円面硯等が出土した。

中空円面硯は、硯部径8.1cm、胴部最大径11.3cm、器高5.3cmである。形状は、坏身の製作技法を用いて、坏身の上面を粘土板で閉塞して硯部(陸)を作っている。硯面は、内堤式凸型硯面で硯部の周りの溝(海)は坏身の受け部を利用している。底部は、欠失して不明ではあるが他の出土例から焼成時の空気抜き用の穴が穿たれていた可能性がある。硯面には、墨を擦った使用痕と縁に墨が僅かに付着しており実際使用されている。時期は同時に出土した須恵器から田辺編年TK43~209型式頃のとみられ、概ね6世紀末~7世紀初頭の遺物であろう。

中畑・古里遺跡は、今回の調査で弥生時代中期から古墳時代後期の遺構・遺物が確認され、古墳時代以前には現在の水田地割とは違う区画が存在している可能性があることがうかがえる。遺物では6世紀末から7世紀初頭(推古朝)の在地産とみられる須恵器が多量に出土したことから、今後集落本体の所在が検討課題になる。また小堤遺跡(昭和61年度調査)で出土した同時期の土師器群と合わせて6世紀末~7世紀初頭の

在地産土器の良好な資料となる。

中空円面硯の出土によって、古代野洲地域には早くから文字が普及していた可能性が高くなり、遺跡の性格も文字を当時最も良く操れる人々として、安氏などの豪族や渡来人が考えられ、豪族の邸宅や渡来人の集落や古代東山道に近い^{いんげん}ため物資輸送等に関する役所的な施設が存在していたとも考えられる。

(野洲町教育委員会 杉本源造)

6. 古墳時代前期から白鳳時代の竪穴住居群 栗東町林 岩畑遺跡

岩畑遺跡は、野洲川左岸自然堤防状微高地上に形成された、古墳時代前期から中世以降に至る複合遺跡として周知されている。周囲に存在する辻、高野遺跡を含めたこの地域は、これまでに古墳時代の竪穴住居が300棟以上確認されており、拠点的な位置を占めていたことが言える。

今回の調査地は、1984～86年度に行われた高野神社周辺の調査地から、南へ約150m下がった所で、民間の倉庫建設に先立つ調査である。調査の結果、古墳時代前期から白鳳時代にかけての竪穴住居13棟、奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物8棟と耕作痕等を確認した。

中心となる13棟の竪穴住居の時期は、遺物の整理が進んでいないので明確に答えられないが、調査時における判断によれば、4～6世紀代のものが12棟で、7世紀代のものが1棟と思われる。平面形は全て方形プランで、規模は概ね一辺が4～6mである。主柱穴は、4本柱のものが主体であるが、柱穴が存在しないものも見られる。また、屋内施設としては、炉、カマド、貯蔵穴と考えられる土坑、壁溝等が存在する。カマドもしくはそれらしきものを付設した住居は5棟存在し、その内の1棟は、煙道がL字状に屈曲するカマドをもつ。このタイプのカマドは、県内では辻遺跡、西ノ辻遺跡に類例があり、県外では、和歌山県田屋遺跡、兵庫県郡家遺跡等にみられる。系譜については、朝鮮半島に存在するオンドルとの関係が指摘されている。一方、住居内土坑は、蓋と思われる板材が炭化して残存しているもの(12号)や、土坑の周囲に砂礫を敷いた特異なもの(6号、9号)が存在した。

今回の調査では、L字状の煙道をもつカマドや砂礫敷土坑の存在から集落内における特定な集団を想定させるものがあり、今後の集落研究にひとつの課題を提供してくれた。

(^{てはら}栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

7. 白鳳寺院関連の掘立柱建物か 栗東町手原 手原遺跡

手原遺跡は、正南北方向の地割の遺存や、古瓦の出

土、総柱建物群の出土により、古代寺院や官衙跡が想定されてきた遺跡である。

1993年7月に行った調査区は、遺跡内においても、とくに瓦が多くみつまっている地区に近接しており、掘立柱建物2棟以上、瓦溜りを検出した。

掘立柱建物のうち1棟は、7間以上×2間の規模をもち、東側に庇がつく南北棟である。建物の主軸方向はほぼ磁北である。柱の掘方は楕円形もしくは隅丸方形で、径は1m前後であり、柱穴からは7世紀末ころの土器がみつまっている。ほかの1棟は調査区外にのび、規模は不明である。

調査区南西隅で検出された瓦溜りからは、複弁蓮弁文軒丸瓦2点、平瓦、丸瓦、須恵器坏蓋が出土した。

今回検出された建物群は、謎の存在である白鳳寺院とほぼ同時期のものである可能性がある。その性格としては、桁行が長く庇を付ける大規模なものであることや、瓦の集中する地区に近接し、調査区内からも瓦溜りが出土していることから、寺院に関連した建物群である可能性が考えられる。具体的には、寺院そのものの施設、例えば僧房や雑舎等もしくは寺院を建立した氏族の館等、性格が考えられよう。

手原に想定されている古代寺院については、現在の集落や草津線手原駅の駅舎と重なり、基壇等の遺構もみつかっておらず、不明な点が多い。しかし、今回のような周辺地区の遺構例等から、徐々にその謎は解明されていくだろう。

(^{てはら}栗東町文化体育振興事業団 雨森智美)



掘立柱建物

8. 弥生時代の大型掘立柱建物を発掘 栗東町下鈎 下鈎遺跡

下鈎遺跡は、縄文時代前期から中世にかけての複合遺跡として周知されている。本調査は下鈎字下神ノ子地区において貸し倉庫建築に先立ち3月から7月の間、約2,400㎡の面積で調査を実施した。

本調査区の周辺では、1988年から数次の調査が行われており、そのうち河道跡からは弥生時代後期後葉の多量の土器と共に銅鏃9点や銅滓も出土している。

今回の調査地は、河道の南西側に広がると想定される集落の一部にあたり、土器群と同時期の掘立柱建物跡7棟以上、土坑、溝等を発見した。その他、平安時代の溝、河道、鎌倉時代の河道、埋土に永楽銭を含む柱穴等が出土した。

弥生時代後期の遺構で注目されるものに大規模な掘立柱建物跡（SB-1）と鳥居状遺構がある。前者は南西から北西に長軸をとる桁行5間、梁間2間の建物で、その規模は桁行8.8m、梁間5.4m、床面積47.5㎡を測る。この建物の特徴は、両妻柱の外側2.8mに棟持柱を設けていることと、桁側柱の掘方が布掘りになっていること、そしていずれの柱穴にしても建物にたいして外側にスロープがあり、柱を落とし込みやすくする構造をとる点にある。また、柱穴内には直径約36cmの柱根が9本残存していた（すべて檜）。

鳥居状遺構は、SB-1の南東約60mに位置する2本柱の遺構で、柱間距離は3.9m、残存していた柱根径は3.4cmと3.8cmでSB-1と同様に柱穴掘方にスロープを持つ。柱の両外側には付属すると思われる柱穴が存在するが、柱筋に溝や柵列は取り付かない。このやや特殊な両遺構は祭式儀礼に関わるものと考えられる。

（勸栗東町文化体育振興事業団 佐伯英樹）



SB-1 北側柱穴

9. 野洲川北流の形成時期 中主町堤 堤遺跡

滋賀県内最大の流域面積を誇る“野洲川”は、新放



壁画調査の実施状況

水路完成前には南流北流の二本に分かれ、それぞれ天井川化した高い堤防内を通過して琵琶湖に流れ込んでいた。現在、砂利採取による平地化事業で急速に消滅しつつある北流についても、その流れ始めた時期ばかりでなく、草津川と共に顕著な“天井川”の堤防が、何時頃誰によって築かれ何故天井川化したのかといった点についても、何等の史料も残されていないのである。それが古代であるのか、近世であるのかさえ判らないのである。

今回調査を行なった堤遺跡は、全体として北北西に向う野洲川北流が、異状なほど南西に屈曲する部分に所在する遺跡である。遺跡の中心は、中主町大字堤の集落とその周辺部で、中世～近世にかけての集落跡と考えられている遺跡である。遺跡の性格や状況を明らかにできるような調査も全く行われていない状況にあるが、南西に隣接する著名な守山市・服部遺跡と同じ自然堤防上にのりやや高所に位置することは、一連の遺跡の存在を予測させるものがあり注意された。

調査は、遺跡が行政界に有ることや開発の内容から、中主町教育委員会と守山市教育委員会の合同調査により、既に工事により壁面が露頭している上流側と下流側の二面（堤防を含む）を利用した壁面調査250m分と、高水敷部分の穴掘（グリット）調査4ヵ所による試掘調査を実施した。

この結果、野洲川北流の固定化が中世末（15世紀）を遡り得ないと考えられる、初期の極めて小規模な右岸と左岸の堤防を堤集落脇に検出したこと、さらにその固定化による高水敷の形成が江戸時代前期には現在と変わらないほどに進んでいたと考えられる資料を得たことがあげられる。特に後者の年代を推定する資料として、1662（寛文2）年に近江を中心に発生した近世内陸地震としては最大級（M7.6）の“琵琶湖西岸地震”の噴砂跡と考えられるものを検出した。

今後は、これらの分析や整理を通じて、その成果を報告したい。

（中主町教育委員会 辻 広志）

10. 特別史跡安土城跡の調査

伝武井夕奄邸跡・伝織田信忠邸・大手道

今年度の調査は上記の3ヵ所を対象に、平成4年6月より開始した。調査面積は約4,500㎡である。

各郭の名称は、貞享年間に描れた安土古城図を基に推定されたものであり、必ずしも天正期の郭の主を示しているものではない。

伝武井邸跡の調査では、門、倉風の建物の3棟と、石組の井戸、溝、水溜などが検出されている。しかし、井戸、水溜については、安土城廃城後造られた可能性が高い。

伝信忠邸跡からは、溝状の遺構、素掘りの井戸などが検出されたが、建物は検出されていない。上記の遺構は、江戸時代以降のものである。

大手道の調査については、現在、旧總見寺から主郭に至る道の下をたち割って調査した結果、天正期のものと考えられる石垣が検出された。このことから、この道は安土城の廃城以後造られた可能性が出てきた。また、前年度までの調査から大手道は、伝武井邸上段までの状況は判明していたが、ここから伝黒金門までの間が不明であった。調査の結果、信忠邸の北の尾根上に天正期のものと考えられる幅4.5m～5mの石段を持つ道が検出された。また、伝武井邸上段からは信忠邸の中に入る石垣の残存と考えられる石列が検出された。これらのことから、大手道は、伝織田信忠邸跡と呼称される平坦地に一旦入った後、黒金門に延びる尾根上を直線的に登ると考えられるに至った。

今回の調査では、大手道の位置が判明したこと、江戸時代の安土城内の土地利用を知る手掛りを得たこと等が大きな成果としてあげられよう。

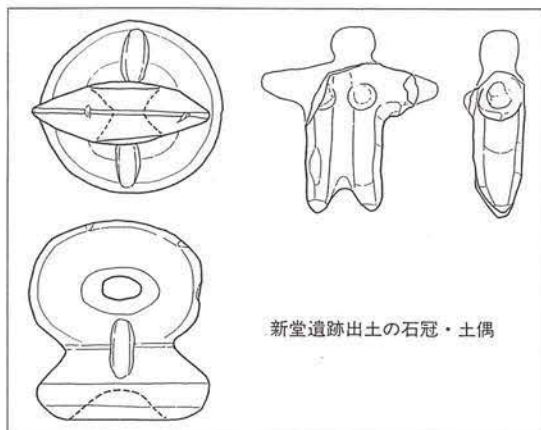
(滋賀県安土城郭調査研究所 大沼芳幸)

11. 縄文時代住居跡

五個^{しんどう}荘町新堂 新堂遺跡

新堂遺跡は、神崎郡五個荘町大字新堂に所在し、箕作山北麓に広がる標高113～110mの微高地上に占地している。この微高地の基盤層である上部砂礫層は、愛知川の約1万年前に堆積した地層とされており、今までにこの微高地上では縄文時代晩期の土器棺墓や古墳時代前期～飛鳥時代の竪穴住居集落、白鳳期の寺院跡・奈良時代の居館跡・奈良時代～平安時代後期の掘立柱建物集落などの多数の遺跡を発見し調査している。

今回、新たに発見した縄文時代の竪穴住居跡は、この微高地帯の北端に当り、周囲の水田地帯より約1～1.5m高い畑地(小字高畑)に所在していた。竪穴住居跡は、表土下約0.5mの円礫を多く含んだ淡黄茶色土を掘り込んで構築されており、住居の形状は長径6.3



新堂遺跡出土の石冠・土偶

m・短径5.5mの楕円形を呈し、内部には壁面に沿って直径0.2～0.4m、深さ0.15m前後の小柱穴が十数個あり、1～1.5m間隔で並んでいる。住居内部の中央よりやや東寄りに直径1mほどの土坑があり、この内に口径30cm、器高34cmの縄文時代中期後半～後期前半頃の粗製深鉢が直立して埋められていた。この埋壘遺構の南側に直径0.4m、深さ0.2mの炉跡がある。住居の内部からは、縄文土器と共にサヌカイト質の石器剥片が数点出土している。

竪穴住居跡から南へ約130m離れた地点でも、縄文時代の土坑を検出している。長径1.5m短径0.7mで深さ0.25mの小判形をしたこの土坑は、底面が火熱により厚い焼土となり、その埋土中からは炭化物と共に縄文土器や土偶・石器・円礫が多量に出土した。縄文土器は晩期後半に属し、土偶は頭部と右手を欠いた現存高6cmを測る粗雑な作りで僅かに乳房の表現が認められる。石器には小型の磨製石斧と敲石・凹石と共に石冠が1点出土している。石冠は高さ8cm、直径7cmを測り形状は頭部が環状で基部は底面を凹ませた円盤状となっている。また環状の円孔部から基部にかけて削り込んだ凹みが左右にある。石質は砂岩である。この石冠は中部高地わけても飛驒地方に分布の中心を持つ特徴的な縄文時代の石器であり、びわ湖地方の縄文文化の特質を暗示する好資料といえよう。

(五個荘町教育委員会 林 純)



縄文時代の竪穴住居跡